

# 哲學研究

第百廿一號

第十一卷  
第四冊

## デイルタイの哲學的方法(三)

勝部謙造

### 二二

デイルタイの了解作用なる哲學的方法は、かくの如く或る意味的表出を媒介として、我々が他人者の體驗を再體驗する働を云ふのである。彼自身の定義に依れば、了解作用とは我々が或る心的なるものをば、其表出たる感覺的に與へられたる記號よりして認識する作用を云ふのである。(Hermeneutik, s. 318) 然らばかゝる了解作用に依つて自己自身の體驗と他人者の體驗とは、如何にして結合せられることを得るのであらうか。主觀的の立場より云へばかゝる了解は結局自己に依りて他を推すところの Analogieschluss に外ならない様にも思はれる。然しながらこの類推作用は只

こゝに云ふ了解作用の極めて粗雑なる外形を示すに止るものである。了解は單なる論理的活動ではない。Nachbilden は即ち同時に Nachleben であつて、こゝには體驗に必須なる全體的活動といふことが必ずず豫想せられなければならぬ。(Individualität s. 277)

この全心意の協動といふことは又、了解作用に或る非合理的要素の伴ふものであることを思はしめる。それは即ち所謂全人的括動がレーベンといふ根源的事實に發するものである以上は止むを得ないことである。如何なる非合理的要素が伴ふかといふに、それは即ち Sympathie といふ情的活動が即ちこれである。了解は全く我々の同感の程度に應じて行はれる。全然同情せざる人をば我々は一般に進んで了解するといふことはせないものである。同情、愛、親密關係といふ様な情的要素が實に全人的了解作用の中核をなすものである。即ち眞の了解は必ずず體驗的でなければならぬ。演劇を視る時の我々の態度は、凡ての關心を離れて直ちに劇中の人物になるとにある。そこには單なる表象作用單なる知覺作用が營まれるのではなくて、脚本家や演技者の藝術に依つて我々自身の體驗が擴大豐饒化せられつゝあるのである。ミツシユはこの事實を指摘して、„Die geistigen Dinge lösen sich nur bei solcher

Wärme der Seele, sonst bleibt das im Ausdruck Verfestigte starr.“ *わづむし居る。* (Misch a.a.o.s.)  
 精神的現象は全心意の協力に依りて初めて捕捉せられることが出来る。物的に凝結硬化せる精神の生命は、愛の暖みに依りて初めて融解せられ得るものである。この故にかの教育活動等に於いて、我々が眞に兒童の心の門戸を開き、これに何等かの規定を興へ得るのは、只この愛の技術にのみ依るものである。 „Wir verstehen und bestimmen einen Menschen nur, indem wir mit ihm fühlen und seine Regungen in uns nachleben. Wir verstehen nur durch Liebe.“ (Dilthey :---Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft. D.G.S. Bd. VI s. 74)

かく了解作用は體驗と同じく全人的の活動であるが、それと同時に又主觀的なものである。かゝる主觀的方法が如何にして客觀的精神科學を構成することが出来るであらうか。デイルタイに依れば凡ての體驗に於いては我々の全心意が活動して居る。従つてかの自然界の關聯は全く抽象的なものであるに反して、精神的歴史的のレーベンの關聯は lebendig であり又 lebensfähig である。かゝる生命關聯は同時に作用關聯でなければならぬ。レーベンの目的性に従つて永劫に作用しつゝある Wirkungszusammenhang でなくてはならない。この故に個々の體驗は必らず自己自身を

超越せる一般的共通的なものを自己の内に包藏して居る。體驗が了解せらるゝ場合の機縁となる「表現」は即ち「意味」である。意味とは自己の屬する全體の中に自己を入れて見ることに依りて生ずる。即ち凡ての體驗は自己を肢體とする一層大なる關聯に接續し、又これに向つて發展しつゝあるものである。かくの如くにして個人の生命關聯は歴史的世界の全體にまで擴大して行くのである。體驗と了解との交互作用に依り、レーベンはかゝる作用關聯に於いて益々深く又廣く自己を顯現するものである。

所謂了解作用に依りて或る主觀と他の主觀とを結合する紐帶は、全心意の活動といふことに依りて示されるレーベン自體の *Strukturzusammenhang* に外ならないのである。個人と個人とを結びつけるものは大なる生命それ自體でなければならぬ。愛とか同情とかいふ感情は我々自身の懐く情であつて、同時に又我々自身のものではない。それは我々の生活を間斷なく前進せしむるレーベンその者の傾向の表示である。藝術家は自己の體驗や了解に依つて人生を描寫する。而かもその天才的創作活動には、個々の人物や出來事を寫して居る間に、大なる人生其者の生命がつかまされて居る。様々の人物の去來する一文學的作物の舞臺の上に、人間全體のあらゆる

力が織込まれて居る。(Dilthey:—Erebnis und Dichtung s. 186)

然るにかゝるレーベンの構造關聯は、實は同時に又作用關聯である。靜止固定せるものゝ關聯ではなくて、所謂働くものゝ關聯である。レーベンに内在する目的性に依りて絶えず發展充實しつゝある關聯である。所謂個人もしくは psychophysische Einheit は、かゝる作用關聯に依りてレーベンの全體性に結合せられて居る。従つてかゝる個人を各々特異なるものにする所謂個性は、決して相互に全く交渉のない絶對的な差別ではない。個性的差別は性質的ではなくして分量的である。程度の上の相違である。(Ideen, s. 229) この事實が實に了解作用に依る體驗の Transposition の可能性を語るものである。即ち如何なる他者の體驗の表現にも、我々自身の生活に全然現れることの出来ない様な何者も含まれては居ない。凡ての個人には同一の生活機能や生活成素が認められることが出来る。人々の素質の相違はかゝる機能や成素の強度に依りて生ずるのである。(Hermeneutik s. 334)

かくの如きレーベンの各單位が程度の上の差異を以て、レーベン自體に結合して居るといふことが、一方では了解に依る或る主觀的體驗と他の主觀的體驗との結合を可能ならしむると同時に、他方に於いて又上述の體驗及び了解の深化擴大を成立

せしむるものである。こゝに於いてか了解作用は其主觀性を脱却して客觀性を獲得するものである。而かもその客觀性たるや抽象的の知力の働の場合の如く外界世界との對應とか或は經驗以前のアプリアオリとかより借りられたものではない。作用關聯に於いて現はれるレーベン自體に内在する事實的客觀性である。シュタインはこの事實を評して、最も、主觀的なる體驗が確定せられ形成せられ普遍化せられるに従つて、こゝに精神科學的客觀性が成立して來ると云ふて居る。リッケルトの學統を引けるシュタインのこの評語には、デイルタイに對する幾分の皮肉が認められぬでもないが、然しデイルタイの哲學的立脚地よりすれば、かく主觀性より客觀性が出で來るといふことは寧ろ當然であると云はねばならぬ。何となれば兩者を峻別するのは全く抽象性に捕はれた見方であるからである。(A. Stein a.o. s. 55)

### 三三

精神科學及び精神科學としての哲學に於いてはかくの如き體驗及び了解に依りて體得せられたものが、更に組織的の知識にならねばならぬ。レーベンが捕捉せられて知識體系とせられなければならぬ。こゝに我々はデイルタイの哲學的方法説

の第三の主要概念たる Typus なるものに逢着するのである。元來この類型なる概念は普通の論理學に於いては所謂 Klasse なる概念に従屬せしめられるものである。然しデイルタイがこの概念の使用法は、それとは趣を異にして居る。ミツシユはデイルタイがこの類型概念をばかゝる關係より抽き抜いて、一層根源的の位置に置き變えて居る。即ちそれはゲーテが見出したところの位置であり、又プラトールがイデアと Methexis との關係に就いて考へたところの位置であるといふて居る。(Misch a.a.o. s. XCIX) 然らばこのデイルタイに依る特殊の意味を有する類型とは、如何なるものを云ふのであるか。

蓋し體驗と了解との行はれる對象は即ちレーベンである。レーベンは具體的なものであり、又流動的なものであることは上述の通りである。然るにかゝる具體的流動的なものは、其縦横の關聯、即ち其發展と構造とに於いてあらゆる種類の程度上の差異を以て、個性的の様相を呈して居る。然しながら其根本於いては等しくこれレーベン自體の分岐である。即ちあらゆる個性的差別相の根柢には、共通的一元的の事實性がなければならぬ。かゝる共通の方面をあらはすものをデイルタイは Gleichförmigkeit と名づけて居る。勿論この同形性なるものは、自然科學に於いても

矢張り認めなければならぬ。然しながら精神科學に於いてはこの同形性は單なる抽象的屬性ではない。これは實にレーベン自體の本質的部分を表示するものである。所謂 immer wiederkehrende Wesenszug でなければならぬ。生命の縦横の流動に於いて断えず繰り返して現はるゝ本質的部分であるのである。この故にデイルタイは das Typische とは現實的なものより取り出されたる das Wesenhafte を意味するといふて居る。(Dilthey:—Die Einbildungskraft des Dichters, D.G.S., Bd. VI s. 186)

哲學的方法としてのこの類型なるものは一般に概念に對立するものである。抽象的思惟は概念を作り出すものであるが所謂全人的の了解作用は類型を見出すものである。概念も類型も共に根源的實在を捕捉する手段であることには變りはない。Schemen von heuristischer Bedeutung であることには相違ない。従つて類型と雖多種多様なるレーベン其儘では勿論ない。こゝには矢張り現實の經驗の eine Steigerung がある。或る意味に於ける理想的のものである。然しながら類型に依るレーベンの高騰の方向は、概念の場合に於ける如く全くの抽象化ではない。Leere Idealität の方向に將來せられるのではなくて、こゝまでもレーベンの具體性、流動性を離れまいとする強き粘着力が働いて居る。(Die Einbildungskraft des Dichters s. 186) 然らばこの類型



は如何なる方法に依りてこの目的を實現するかといふに、それはレーベンの流動し於ける雜多的なるものをば、或る一の具象的なるものに依りて代表せしむるといふやり方である。而してかゝる具象的類型に内在する強力にして明晰なる構造が、我々をして一般レーベンに於ける比較的微弱なる又混淆せる經驗の「意味」を提示し、これに依つてレーベン其者を了解することを得しむるものである。例へば文學上の作品に於いては、凡てがかゝる意味に於ける類型の特性を現はして居るものである。一の作物中の人物は皆類型的である。たとひそれがある現實の人間の實寫であつても、藝術的の見地より見る時は、この人物に依りて人間生活の本質的部分が表現せられて居るのでなくてはならぬ。かゝる類型の捕捉及びその強力なる描寫に、天才的藝術家の創作力が働くのである。或は又文學者に依りて描寫せられる人間の激情、行動の動機、其他凡てが、悉くかゝる意味に於ける類型的のものである。而して人間生活のかゝる激情や行動や運命やの描寫様式が又類型的である。作中の主人公や、彼の激情や彼の運命やは、悉くある特定の生氣に依つて活躍せしめられて居る。かくして作品其物が生命を獲得し一の個性的存在となつて居るのである。

(187)

s. (187)

かくの如く類型の根本的特徴は具象的といふことである。蓋しレーベンの歴史的の流動には個性的の方面があると共に、又一般的共通的の方面がなければならぬ。ドイツ人の所謂個性をば性質的の差別と見ずして、分量的程度的のものを見る考の根柢は、そこに求められなければならぬ。而して最も重要な點は、現實のレーベンに於いてはこの個性的と一般的とが不可分離的に結合して一體をなして居るといふことである。所謂 *Konkretion des Allgemeinen im Individuum* (*Misch a.a.o. s. CIV*) であるといふことである。かゝる具體的なるものを捕へんとする類型の特徵が、*Anschaulichkeit* 或 *Bildhaftigkeit* といふことにあるといふのは、蓋し當然であると云はねばならぬ。この點に於いて我々は矢張り藝術の特性から學ぶ處が大なるものである。凡ての藝術は實に藝術家其人の體驗の表現である。レーベンを除いて藝術の内容はない。而かもかゝる内面的なるものを外面的に表現する處に藝術の努力がある。然るにかゝる表現の手段となる外面的形象は、内面的生命を自己の内に宿して居るものでなければならぬ。この故に凡ての藝術は象徴的でなければならぬ。獨り藝術のみならず、凡ての精神科學に於いても矢張り同様である。レーベンの活動其者を捕へる科學は類型的でなければならぬ。或は哲學に於いて、又は宗教學に於いて、

經濟學倫理學、凡てこの態度に立つのでなければならぬ。

#### 一四

次に類型は所謂本質性を表すものでなければならぬ。この點に我々はデイルタ  
 イの類型の第二の特徴を認めることが出来る。而してこゝに又彼の類型と「價值」又  
 は「規範」との關係が窺はれることが出来る。我々が先にも述べし如くにデイルタイ  
 の所謂價值とか又規範とかいふのは、超越的のものを云ふのではない。レーベン其  
 者に矢張り内在して居ると考へて居る。目的的なる構造に従つて不斷に流動發展  
 するレーベンは、其各々の階段に於いて自己自身の *Vollkommenheit* を實現せんとし、又  
 現實に於いて種々の程度にこれを實現しつゝあるものである。例へば兒童の生活  
 の發展とは即ち其生活過程の完全性を將來しつゝあるといふことである。然るに  
 かゝる完全性に向はしむるものは結局兒童自身の内に求められねばならぬ。彼等  
 の生活に於けるレーベンの構造關聯その者が即ちそれである。従つて兒童教育の  
 規範は矢張りこの完全性に求められなければならない。(Über die Möglichkeit einer all-  
 gemeingültigen pädagogischen Wissenschaft, s. 68) 所謂類型の本質性と價值との接觸點はこの

完全性といふ考方に認められることが出来るのである。

デイルタイはこの類型の本質性といふことについては、次の二つのことをあげて居る。即ち先づ類型の第一の意味は *Angemessenheit* もしくは *Vollkommenheit* といふことである。凡て我々が動く者を見る時は、其運動の理解もそれから運動の完全性といふことゝは不可分離的である。舞踏者とかスケートをやつて居る者とかを見る場合に、その我々の眼に寫る形姿と、これに關聯して我々が想起する記憶心像とは、必ずかゝる運動が適當に完全に行はれた場合といふ見地からして結合せられるものである。即ち事實的表象と價值的表象とは全く不可分離的であつて、これを分離對立せしむるのは思惟の努力と練習とを俟たねばならぬ。かくして我々人間のあらゆる生命表示には、事實と價值とのかゝる結合としての類型が成立して來るものである。この故に類型は同時に規範を示し、個々の生命表示でありながら其現すものは種類全體である。先に我々がレーベンの個々の事象がその意味といふことに依つて全體を表示するといふたのも矢張りこのことを指すものである。この故に類型は即ち本質的なるものに依つて凡ての非本質的なるものゝ意味もしくは價値を示し、而してレーベンの全體性に依り、それは同時にレーベンに規範を與ふるもの

である。(Individualität s. 279)

デイルタイは類型の本質性に就いて第二に、類型はレーベンのかゝる完全な場合其者を云ふのみでなく、更にかゝる完全なる場合の規範性の特徴をば特に高調せるものでなければならぬといふて居る。即ちレーベンが學的知識となるためには、こゝに現實の生命過程からして捕へ來られなければならぬ。かくの如き *Herausgehobene Gemeinsame* といふことが所謂精神科學の方法としての類型である。即ちこゝに現實の過程からして理想的の形象として高騰強化せられて居るのである。然かもかゝる現實の理想化に依りても、どこまでも其具象性を失はざる處に、この類型の根本的の特徴がある。例へば沙翁の描寫せる人間激情の類型は、現實の生活には求められ得ざる理想である。そこには現實の生活に認め得ざる程の大なる生命の律動が波打つて居る。然しながらかゝる生命の律動も、どこまでも生活其者に依りてあらはされて居る處に、彼の藝術の生命がある。(Individualität s. 282)

然るにこの類型の本質性といふことは、他の一面に於いて類型の普遍性といふことと結びついて居る。類型的捕捉は即ち「個性的なるものに於いて普遍的を具體化する」ことである。殊に上述の如く精神科學的方法としての類型は所謂 *herausgehob-*

ne Gemeinsame である。其通的に依りての本質性の捕捉である。茲に於いてか我々は哲學的方法としての類型の第二の對立を考へて見なければならぬ。それは即ち類型と法則との對立である。具體的流動的なるものゝ捕捉に於いても、在來所謂法則といふことが考へられないでもなかつた。歴史の普遍的法則といふ如きは其著しい一例である。然しながらかゝる態度は所謂體驗と了解とを其主要方法とするデイルタイの哲學に於いては、決して許されることは出来ない。何となればそれは結局抽象的思惟に依るレーベンLebenの固定化に過ぎないからである。

類型と概念とが混同せられ易いのと同様に、類型は又この普遍的法則なるものと屢混同せられ勝である。それは上述の類型の普遍性といふことから來て居るのである。シュプランガアはデイルタイのこの類型が個體と法則の中間に位するものであることを説き而してリッルRiscl (O. Riscl: — Die Kausalbetrachtung in den Geisteswissenschaften s. 18) の所謂類型は個體と特殊性を共有し、法則と普遍を共有するといふ語を引用して居る。(Spranger: — Die Grundlagen der Geschichtswissenschaft s. 94) 即ち法則も類型も共に普遍的なるものを表はすといふ點に於いては共通である。然らばその相違點はいづれにあるのであるか。それはかの概念と類型との相違の場合に於けると同様に、

一言にして云へば即ち抽象化と具體化もしくは個性化の相違に歸着するのである。即ち法則の場合に於いては其普遍性は全然抽象的である。然し其代りにそれは絶對的の普遍性を表はすのである。凡ての法則は如何なる場合と雖決して例外を許さない。然るに類型の場合に於ける普遍性はこれとは趣を異にして、相對的普遍性である。動的統一としてのレーベン全體に連なる普遍性である。而してこれは我々が抽象の飛躍を試みず、どこまでもレーベンの具體性に止る以上は止むを得ないことである。この故に我々が若し誤つて類型と法則とを混同し、前者に後者特有なる絶對的普遍性を附與する時は、そこに大なる思想の混亂を來し、精神科學の生命を阻害するものである。(vgl. Turnarkin: — Wissenschaftliche Psychologie s. 139)

このことは又同時にこの類型が全然方法上の手段であつて、生命の實在其者を意味するものでないといふことを我々をして想起せしむるものである。デイルタイの門人ツマルキンはこのことを彼の心理學觀に於いて述べて居る。即ち心理學的類型は、精神現象をば自然法則の如くに一義的に規定するものではない。類型は寧ろ精神的目的關聯の種々なる、而して共在的なる可能性をば *hiden* して行くものである。この故に類型には決して所謂 *Konstitutive Bedeutung* は附與せられることは出來ぬ。

それは我々が種々雑多なレーベンの形體の中に於いて Orientierung を行ふといふ regulative Gesichtspunkte に於いてのみ深き意義を有するものである。もしこの關係を誤まつて類型に自然必然性を以て作用する法則といふ如き構成的意義を與ふる時は類型は流動的レーベンを現はす代りに Dificile Schema をなつてしまふものであると云ふて居る。(Tunarkin: a.a.o. s. 138) (未完)

前號所載テイルタイの哲學的方法(二) 正 誤

誤 正

二六頁第一行 體系的であつて

體系的ではなくて

二七頁第三行 最後の論證的思惟

最後に論證的思惟

二八頁第十行 今事業して居る

今考察して居る

同 第十一行 組織的に其方法に其

組織的に其(其方法に削除)

二九頁第一行 捕捉あるものが

捕捉なるものが

同 第九行 ウインテルバンド

ウインテルバンド

三三頁第十一行 意志活動

意志活動

三八頁第十二行 對生兒

新生兒